

高校・大学時でひきこもりとなった子どもをもつ母親の体験

－ひきこもり「親の会」に参加するまで－

齋藤まさ子¹⁾・本間恵美子²⁾・真壁あさみ¹⁾・内藤 守¹⁾・本間 昭子¹⁾

1) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科

Experience of Mothers of Hikikomori Children during their High School and University Days :

The Process of Mother's Participation in a Hikikomori "Parents' Group"

Masako Saito,¹⁾ Emiko Honma,²⁾ Asami Makabe,¹⁾
Mamoru Naito,¹⁾ Shoko Honma²⁾

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF CLINICAL PSYCHOLOGY

要旨

本研究は、高校・大学時にひきこもった子どもの母親の、親の会に参加するまでの体験のプロセスを明らかにし支援の検討を目的とした。母親12名を対象に半構造化面接を行い、面接内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した結果、5つのカテゴリーと12の概念が抽出された。コアカテゴリーは《探し求める道しるべ》であり、その後の3つのカテゴリーに影響を与えていた。〈子どもには対症療法〉でその場しのぎの対応を繰り返し〈孤独感の中で苦悩〉し、わかる人とつながり有効な情報を得て先の展望を持ちたいという思いで〈親の会への参加決断〉をしていた。《探し求める道しるべ》状態が継続していることから、ここへの適切な対応で早期に母親の心理的安定を図ることができる可能性が高く、“母親の受容”、“支援者のひきこもりに関する理解の促進”が重要な要素と考えられる。

キーワード

ひきこもり、母親、体験、親の会、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Abstract

The goal of this study is to clarify the experience process up to joining a parents' group, for mothers of school refusal children who refused to go to school or university and ended up as hikikomori, refusing to go out at all. Another goal is to examine support for such mothers. Semi-structured interviews were conducted with twelve mothers. By analyzing the interviews using the revised version of the grounded theory approach, five categories and twelve concepts were extracted. The central category was looking for a guidepost and this affected the other three categories. In (makeshift solution for child) mothers repeatedly tried to find some stopgap solution. In (anguish amid a sense of isolation) they struggled on alone, feeling isolated. In this process, mothers made the (decision to join a parents' group) because they wanted to meet someone who would understand, obtain useful information and have some idea of what the future might hold. Since the looking for a guidepost situation continued for some time before they made the (decision to join a parents' group) it is highly likely that these mothers' psychological state can be stabilized through an appropriate response, and that they will be able to deal with their child head on, and adopt an attitude which seeks to understand him. From the analysis results, it is suggested that “mother's acceptance” and “encouragement of supporter's understanding of hikikomori” are important elements in supporting responses to looking for a guidepost.

Key words

hikikomori, mother, experience, parents' group, modified grounded theory approach

I はじめに

2006年3月末日現在、わが国ではひきこもりの子どもがいる世帯は推定で約26万世帯^{1) 2)}とされている。境が2012年に発表した全国組織であるNPO法人ひきこもりの親の会のメンバー332名を対象とした調査によると、ひきこもり本人の年齢は平均31.47歳で、ひきこもり開始年齢は最年少が8歳であり、12歳から目立って増加し始め22歳をピークにその後は徐々に減少している。ひきこもり期間の平均は10.21年という長期化を呈している。また、母親の年齢は平均60.09歳であり、父親は平均64.29歳である。これらの数字から、ひきこもりは10歳代という比較的若い年代から始まることが多く、長期化を呈する傾向があること、さらに両親の多くが成人期中期から老年期という年代にあることがわかる。ひきこもる子どもはもとより、家族自身の精神的健康も支援の対象として指摘されているが⁴⁾、家族のライフサイクルや発達課題の面からみても、心理的負担は大きい。特に、母親は子育てに中心的に関わってきていることから、自責感情を抱きやすく、さらにひきこもりについての社会的認知度が低いこともあり、周囲からの批判的言動により傷つき体験を繰り返している場合が少なくない。こうした孤軍奮闘のなかで、ひきこもる子どもに最も近い存在として、また支援者としても中心的な役割を担っている。

筆者らは⁵⁾継続して親の会に参加する母親を対象とした面接調査を実施し、親の会に入会してから、母親自身の価値観の転換の必要性を認識するまでのプロセスを明らかにした。それによると、子どもがひきこもってから母親が親の会に参加するまでの期間が年単位と長期であるにも関わらず、手のうちようがない状況の中で右往左往している姿が浮かび上がってきた。親の会に参加後は、母親自身が心理的に安定することで、子どもに正面から

向き合おうとする姿勢が見られるようになり、語り合いやひきこもりに関する講義などを通して学習を深化させ、徐々に子どもの全体像が理解できるようになっていた。このプロセスから、母親が子どもに正面から向き合い理解しようとする姿勢に変化するには、まず母親の心理的安定を図ることが重要であることがわかった。

本研究では、様々な支援が準備されている義務教育期間を終え、高校と大学でひきこもった子どもの母親が、親の会に参加するまでの体験のプロセスを明らかにする。これが明らかになれば、母親の心理的安定のための支援の方向性が見えるようになり、どこに注目して支援すれば母親の行動変容を期待できるのかが明確になる。これまでも、ひきこもり親の会あるいは家族教室参加者を対象とし、その効果や対応の変化についての調査がいくつか見られる^{6) 7)}が、いずれも親の会に参加後を対象としている。また、子どもがひきこもってからの親の体験に注目した論文は見られ、親の役割の重要性や望ましい変化の方向を示唆しているが、親の会に参加するまでの体験のプロセスについてはまだ十分に示されているとはいえない。

II 研究目的

本研究では、親の会の参加者で子どものひきこもった時期が高校と大学の母親に面接調査を実施し、母親が親の会に参加するまでの体験のプロセスを明らかにする。さらに、支援について検討することを目的とする。

III 研究方法

1. 研究対象者

対象者は、北陸地区、東海地区、九州地区でNPO法人として活動する「親の会」に参加する母親12名である。子どもの不登校の開始

時期は、高等学校は9名、大学は3名である。対象者の年齢は、30歳代1名、50歳代2名、60歳代9名であり、ひきこもり子どもは男性10名（83.3%）、女性2名（16.7%）であった。ひきこもり平均年数は約14.5年であり、最短期間は6年、最長期間は22年であった。

2. 調査概要

調査は、2011年10月～2012年3月の期間に、調査対象である北陸、東海、九州の各地区に出向き、プライバシーの確保できる部屋で実施した。質問項目は、親の会に参加するまでの体験であり、面接時間は1～2時間で半構造化面接の形をとった。

3. 倫理的配慮

事前に全国組織であるNPO法人「親の会」の役員に、各会の代表者の全体会で文書で研究の趣旨の説明を依頼し、賛同が得られた「親の会」に研究者が直接出向き、会員に文書を用いて研究の趣旨を説明した。代表者には、協力者を募ることと面接場所の設定をお願いした。対象者に対しては、面接時に研究目的、方法、参加の任意性、不参加の不利益はないこと、匿名化による個人情報の保護、データの処理について文書を用いて説明して参加の意思を確認し、同意書に署名を得た。面接内容については許可を得た上で録音した。

この研究は、新潟青陵大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 分析方法

データの分析には、質的帰納的研究であり、木下が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA⁹⁾）を用いた。データ分析は、面接の録音データの逐語録をもとにして、テーマに関連がある箇所に着目し、それを1つの具体例として抽出し分析ワークシートに記入した。その他の類似例も同様に同一のワークシートに追加記入し

ていき、類似例全体を説明できる定義を記入し、ワークシート毎に1つの概念の生成を行った。データは継続的に比較分析し、概念を分類してまとめる作業を繰り返してカテゴリーを生成していった。またカテゴリー間の関係を検討して、コアカテゴリーを決定した。その間にも再びデータに戻り、妥当性を確かめながらカテゴリーを収束し精緻化していった。分析を進める段階で共同研究者からスーパービジョンを受けた。

なお、この方法は限定されたテーマについて、収集されたデータに関する限りにおいて厳密な解釈により説明力のある結果を提示できる点が特徴であると同時に、これが限界でもある。

IV 結果・考察

M-GTAでは、質的データの解釈をしながら分析を進めるため、分析結果と考察をまとめて報告する。

分析の結果を図1に示した。本研究では、5つのカテゴリーとそれらに包含される12の概念が見出された。コアカテゴリー《 》、カテゴリー〈 〉、概念【 】で表す。分析結果の概要を述べ、その後カテゴリーごとに記述する。

子どもが不登校になり〈わけがわからず混乱状態〉に陥った母親は、関係機関に相談するが【めぐり合えない納得情報】や【後ろ向きの相談機関】の対応を経験し、《探し求める道しるべ》状態である。それは〈子どもには対症療法〉や〈孤独感の中で苦悩〉へと互いに影響しあっている。〈子どもには対症療法〉では、【その場しのぎの対応】や【社会資源の不適合】を体験する。また、子どもの社会との【つながり確保に奔走と落胆】などをおして子どもの状況に対して【ひきこもりという認識】を持つようになる。母親自身は【気になる周りの反応】で思い悩み、【孤

独な責任感】や【他力本願な父親】など家の内外において〈孤独感の中で苦悩〉する。これらの体験を通して【分かち合いたい】思いや【先の展望が欲しい】【有効な情報獲得への期待】から〈親の会への参加〉を決断する。

1. 〈わけがわからず混乱状態〉

〈わけがわからず混乱状態〉は、子どもが不登校となり、理由も対処の仕方もわからず混乱していたことを表すカテゴリーである。

「あんなにしっかり者だったのに、まさかこんなことあるはずはない、一番安心してた子なんですね」と母親が抱いてきた子どもに対するイメージと、学校に行けない子どもの姿の齟齬を受け入れられず、混乱している状況である。一方、「必死でしたね・・・そのころの記憶が正直な話ないんですよ。私の頭の中ではあのころのとっても苦しかったのがいまでは削除されているので」は、子どもが不登校になった当時の記憶が残らないほど強い混乱状態であったことを表現している。

2.《探し求める道しるべ》

《探し求める道しるべ》は、〈子どもには対症療法〉〈孤独感の中で苦悩〉の両方に影響を与えているプロセス全体のコアカテゴリーである。【めぐり合えない納得情報】【後ろ向きの支援機関】の2つの概念で構成され、進むべき方向性を示すような納得できるアドバイスを探し求めている状況を表している。

【めぐり合えない納得情報】は、ひきこもりに関する情報を探したが期待したようなものにめぐり合えなかったことを表す概念である。「こっちの話聴いてくれるだけで、アドバイスもなくてらちあかないと判断したので1回きりでやめました。たぶん、あの方はひきこもりの人を知らなかったんだと思うですよ」とひきこもりのことを知らない人に聞いてもらっても、解決の方向につながらないと判断し一回で相談をやめていた。齊藤¹⁰⁾は、ひきこもりの相談において、親が子育ての頃の良かったこと、うまくいかなかったことを

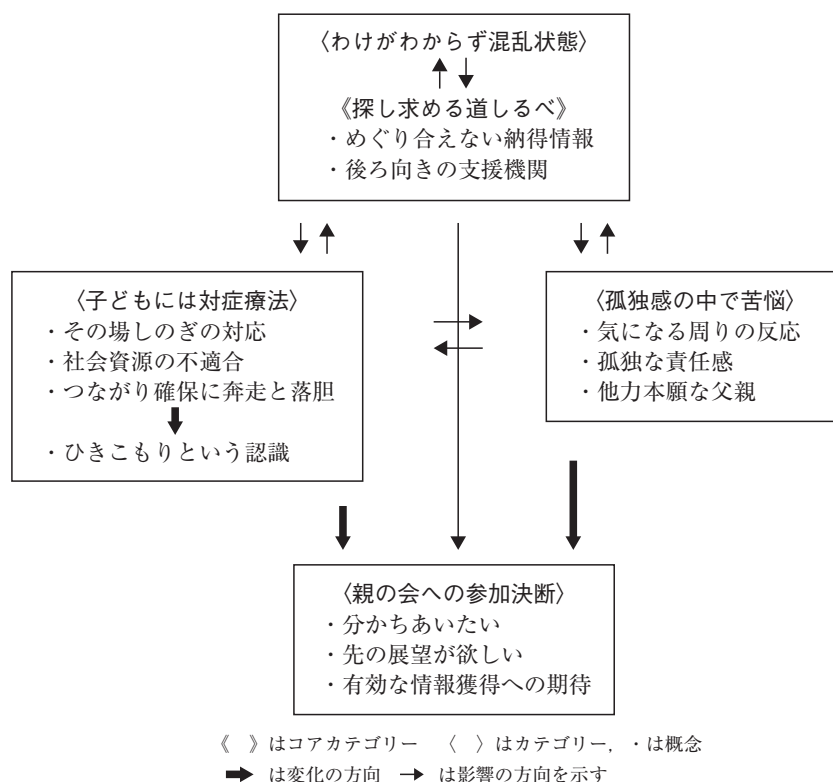


図1 結果図（母親がひきこもり「親の会」に参加するまでのプロセス）

思い出しながら、それらを同じように受け入れなおす場として面接が機能すると相談継続の動機付けとなると述べ、母親が語ることを受け止められ、受容された体験を得ることの重要性を示唆している。また、「医療相談に行ったんですが、治してもらおうというよりも、どういうふうに対処したらいいか聞きに行ったのですがなかなか・・・」「公的なところとか病院とかは、こういうやり方だったら動くんじゃないですかとか、そういうノウハウなんかは本人の状況がわからないわけだから無理でしょうかね」「あちこち情報探してもあてがなかったんですよ。当てとは知識を知っている人、たとえばもっている人に対してどう対処したらいいだとか」と方々医療機関や相談機関をまわったものの、期待した回答を得ることができなかったことが語られた。さらに、「単純に甘えているとかなまけているとかいわれて、うちの子はちょっと違うなと・・・いろいろさがしたんですけどどうしても私の納得のいくところがなくて」と情報であれば何でもいいわけではなく、ひきこもるわが子に相応しい納得のいく情報を求めていることが語られた。

【後ろ向きの支援機関】は、公的機関や病院は前向きに取り組む姿勢が感じられなく期待できなかったことを表す概念である。「どこも切れてしまって、親もどこにつないでいいかわからなくて。精神保健福祉センターに行きましたが、あそこに親の会がありますよとか精神科の病院はここがいいですよとか、もうそれで終わりなんですね。自分で後は動いてくださいみたいな。情報は出してくださるんですけど」と情報は手に入ったものの、それでは満足しなかった不全感を語っていた。前述の【めぐり合えない納得情報】では、具体的な情報を探していたにもかかわらず、情報のみ与えられても満足しなかった。母親の求めているものは、ただ他機関を紹介するという消極的な関わりではなく、相談者

の話に耳を傾け共に問題に立ち向かおうとする姿勢であったのではないかと考えられる。

3. 〈子どもには対症療法〉

〈子どもには対症療法〉は、【その場しのぎの対応】【社会資源の不適合】【つながり確保に奔走と落胆】【ひきこもりという認識】の4つの概念で構成され、子どもに正面から向き合えないで、方向指示器のないままただその場しのぎの対応をしている状況を表すカテゴリーである。

【その場しのぎの対応】は、子どもの気持ちを理解するというより、そのときその場が治ればいいという対応をしていたことを表す概念である。「気持ちをわかって話すのではなくて自分の不安を解消するために、暴力になったら困るからどうしよう、どうしようという不安です。本当の会話ができていなかった、娘の気持ちを受け入れてなかった」と子どもの気持ちに向き合うことなく、ただ自らの不安を解消するためのその場しのぎの対応に終始していたことを表現している。

【社会資源の不適合】は、ひきこもりからの回復を願い、さまざまな社会資源を活用したが、子どもが適応できなかったことを表す概念である。「児童相談所へも一度行った事がありますが“どうしてそんなことで学校へ行かないんだ”みたいなことを言われて、子どもはショックだったようでそれから行ってません」と相談機関を活用したが、担当者のごとくに傷つき継続に至らなかったことが述べられた。また、「集団生活をするところに連れて行きましたがパーっといなくなって・・・」など、規則正しい生活や親子の関係修復を願って集団生活をする施設に預けようとしたが、子どもが拒否反応を示したことが語られた。このように、ひきこもりからの回復を願ってさまざまな社会資源を活用していたが、ほとんどが母親や子どもの期待どおりに進まず、継続まで至っていない。その反

面、対極例として「あの子の小学校の先生を頼みました。退職なさってましたので、来ていただけないかと頼みました。自然体でのびのびさせてくれるいい先生でした」と母親が子どもの回復につながりそうな人に支援を依頼し、一定の成果があった旨の語りが聴かれた。

【つながり確保に奔走と落胆】は、子どもの所属がなくならないように引き続き通える場所を探したが、子どもは続けられず諦めざるを得なかったことを表す概念である。「子どもが高2のときに不登校になって、通信制の普通に通う高校を受験しましたがダメだったんですね。だから通信制で一応申し込んで行けるような状態にしていたんですが、結局もう学校に行けない状態なのか、どこに行ってもやっぱり行けないんですね。・・・苦しいから拒否ですよ。だから隠れるという状態でそれを無理やり出そうとしたんですがダメでした」と子どもの所属を絶やさないように次から次へと準備したものの、実際には続けられないことを実感している。「どこへ行ってもやっぱり行けない」ということばは、叱咤激励しても通い続けられないことを漠然と感じていたことを表現しており、徐々に状況を受け入れていく心情が表出されていた。

【ひきこもりという認識】は、紆余曲折を経て子どもの状況をひきこもりと認識したことを表す概念である。「ひきこもった当初はひきこもりってということば自体がわからず、どうしていいかというだけで・・・ひきこもりイコール統合失調症で、でも統合失調症だからといってそのまま病院へ連れて行っても思ったり、病院に連れていこうにも本人が家から出なかったので・・・最初にひきこもりということばを目にしたのは斎藤環さんの本なんです」のように、1998年に出された斎藤環の『社会的ひきこもり』を読んで、ひきこもりではないかと認識している。一方、子どもの状況を統合失調症と自己判断していたこと

がわかる。本人の気持ちに配慮するにしても、統合失調症ならば本人の予後のためにできるだけ早期の受診が必要であるが、その認識がなかった可能性が高い。また、「摂食障害で病院にかかっている、そこに親の会の理事長さんが来られてひきこもりの関連の話もあって・・・」とたまたま講演でひきこもりの話を聴くことが、ひきこもりという認識につながったことが語られた。

4. 〈孤独感の中で苦悩〉

〈孤独感の中で苦悩〉は、【気になる周りの反応】【孤独な責任感】【他力本願な父親】の3つの概念で構成される。仲間や親戚に相談しても理解は得られず、孤立無援の中で苦悩する姿を表現するカテゴリーである。

【気になる周りの反応】は、子どもがひきこもったことで、周りの反応を気にしていたことを表す概念である。「あのころニュースでいろいろやっていましたよね。ひきこもりっていうのは恥ずかしいって、すごい恥ずかしいって思ったんですね。親のせいにならなっているから私に責められているような感じで」と2000年前後にひきこもりの少年が引き起こした事件報道を引き合いに出し、育てた親の責任と捉えて恥辱感を抱いていた。また「学校で知り合いのお母さんたちが、知っていて何もいわないのが非常に心理的にきつかったです。地元ではなく、出て活動するようになりました」とそれまで築いてきた集団の中での自己の立ち位置が、脅かされるような心理的状况であったことを表現していた。

【孤独な責任感】は、不登校になったのは救えなかった自分の責任だと思っていることを表す概念である。「わたしがいい思いをしたために、子どもに押し付けてきたっていうのがこの子に出たかなと思っています」と自己満足のために子どもに犠牲を強いてきたと、自己を洞察している。また、「うちの子

は発達障害があるというふうに見ておりますので、小さいときに気づけばよかったんですが」と早期に発達障害だと気づけなかった自分を責めている。「主人にすればどうしていいかわからなかったと思いますが、家の中で私だけの責任のような感じで」というように、夫の気持ちに配慮しつつも責任回避と感じられる態度への不信感を表現していた。

【他力本願な父親】は、父親が主体的に動こうとしなかったことを表す概念である。「夫の協力はなかったですね、わたしがすることにダメはないけど、自分から一緒にというのはなかったですね。逃げていました」と積極的に子どもの問題に関わる姿勢がなかったことを語っており、前述の【孤独な責任感】を強める一つの要因と考えられた。一方、母親の立場からは父親の姿勢が他力本願のように見えるが、実際に父親の気持はどうだったのかは明確でない。中垣内¹¹⁾は、母親の必要以上の囲い込みにより子の社会化を妨げる状況を「母性の過剰」と表現し、それを防ぐために父性が役割を果たす必要があると述べている。さらに、父親は子どもと向き合う必要性を感じても、世間体や会社の目を気にして先送りする傾向にあることを指摘している。母性の過剰を防止するために、父親の役割は大きい。父親が子どもに向き合う必要性を感じているのであれば、先送りすることなく個々のやり方で父親の役割を果たせる方法があるのではないだろうか。今後、父親自身の体験も明らかにして、支援の糸口を見出していく必要がある。一方、対極例として「親の会の紹介は夫がしてくれたんですよ。支援センターでこういうものをやるらしいよとチラシを持ってきてくれたんです」と夫婦共同で情報を共有しながら子どものひきこもり対策に取り組む姿もあった。

5. 〈親の会へ参加決断〉

〈親の会へ参加決断〉は、【分かちあいた

い】と【先の展望が欲しい】【有効な情報獲得への期待】の3つの概念で構成される。これは、同じ思いで苦しんでいる家族と気持ちを分かちあい、新たな情報を得ることで状況の変化を期待するカテゴリーである。

【分かちあいたい】は、ひきこもりの知識や対処の方法を知っている家族と分かち合うことで、不安を軽減したいと思ったことを表す概念である。「一番ひどかったときです。何かやっぱり親としても不安ですし、何かにつながりたいな、治療するだけの病院じゃないほかの何かにつながりたいという気持ちがわいてきて・・・自分の気持ちを吐き出すところ、共感するところ、それが必要なんだなと思って親の会に入会させていただきました」と不安を軽減する場所として、同じ苦しみを持つ家族と語り合いたい、わかる人たちとつながりたいという思いから親の会への参加を決断していた。

【先の展望が欲しい】は、状況改善が見られないため、行き詰まりを打破して先の展望を持ちたいと思うことを表す概念である。「お互いがいい知恵を出し合って皆さんで意見交換できたらいいなと思いました」や「元ひきこもりの方が今こういう風にされているということを講演で語る会があって、それにちょっと関心があったので行ってみようかなと思って」とそれぞれの事情の中で先の展望が持てない状況を打破しようと、親の会への参加を考えていた。

【有効な情報獲得への期待】は、親の会で知りたい情報や知識を得ることができるのではないかと期待したことを表す概念である。

「子どもはそうするべきだっていう親だったから、どう考え方変えればいいかっていうのがどこにも勉強する場所がなかったんで」や「ちょっと手の打ちようがなくて、どう考えていいものかというのが全然わからなかったときですね」と母親自身の課題を克服するために、あるいはひきこもらざる得ない状況に

いる子どもの理解や対応策、進むべき方向性などについて暗中模索状態を脱するために親の会に参加したことを表現していた。

V 全体の考察とまとめ

母親はひきこもる子どもの最も身近な支援者であるが、有効に子どもを支援するためには、まず母親の心理的安定を図ることが次のプロセスにつながる要因であった。¹²⁾高校と大学で不登校になった子どもの母親が、親の会に参加するまでの体験のプロセスを明らかにした結果、<親の会への参加決断>に至るまで<探し求める道しるべ>状態は続いていることが明らかとなった。この<探し求める道しるべ>に焦点を当てた支援により、早期に母親の心理的安定を図ることができるのではないかと考えられ、その対応策として、“母親の受容”と”支援者のひきこもりに関する理解の促進”が示唆された。

1. 母親の受容

平成22年に厚生労働省が公表した「ひきこもりの評価・支援ガイドライン」¹³⁾で、齊藤は家族に対する個別面接の意義と目的の第一番目に“親の苦悩が受容された体験を得る”ことをあげ、親が話したいことを十分話すことができ、聴いてもらえたという実感を持てるかどうか¹⁴⁾が次につながると述べている。さらに、佐藤は傾聴について、何でもうなずいて聴いていけばいいものではなく、相手を受け止めるという働きかけが必要であり、援助職としての基本的な人に関わる態度として求められているともいう。安心して自由に話せる雰囲気の中で、母親のそれまでたどってきた苦しかった体験の語りを受け止めながら聴くことが、“苦悩が受容された体験を得る”ことにつながるものと考えられる。図1の結果図で子どもに関わるカテゴリーである<子どもには対症療法>において、子どもを受容す

る概念が見られない。母親自身が十分に受容される体験を持つことが、心理的な安定やひきこもる子どもの受容につながっていくものと考えられる。

2. ひきこもりに関する理解の促進

2009年の子ども若者育成推進法の成立や厚生労働省の2009年度の「ひきこもり対策推進事業」の創設などもあり、ひきこもりの普及・啓発は進んでいる。しかし、2000年に起った新潟少女監禁事件などにより、ひきこもり状態にある人の社会における否定的イメージは、今でも払拭されていない。¹⁵⁾また、ひきこもりを甘えとみなす風潮から社会問題として注目されてこなかったという、ひきこもりについての誤った理解による弊害が指摘されている。このように、ひきこもりに関する正しい社会的認知度が決して高いとはいえない状況は、支援者に関してもいえるものと考えられる。【めぐり合えない納得情報】や【後ろ向きの支援機関】は、対応した担当者が相談に応じるための十分な準備状態でなかったことが一因ではないかと考えられる。ひきこもりの背景は様々であることから、知識のみ詰め込んでも十分な理解にはつながらない。知識と実践の両輪で、ひきこもる本人や家族から謙虚に学んでいく姿勢が求められる。

さらに、情報のみを提供されることに対して母親は不十分さを感じていた。単に情報のみが欲しいわけではないのである。支援者には、共に理解していこうとする積極的で誠実な態度が求められているのではないかと考えられる。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究者に体験を語ることについて快くご協力いただいたNPO法人全国ひきこもりKHJ親の会の皆様に深謝いたします。

なお、本研究は平成23年度～25年度科学研究費補助金基盤研究(C)(No.23593475)の助成を受けて行った。

引用文献

- 1) 齊藤万比古. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(研究代表者 齊藤万比古). 2010:8.
- 2) Asuka Koyama, Yuko Miyake, Norito Kawakami, et al.: Lifetime prevalence, psychiatric comorbidity and demographic correlates of “hikikomori” in a community population in Japan. *Psychiatry Research*. 2010;176(1):69-74.
- 3) 境泉洋, 堀川寛, 野中俊介ほか. NPO法人全国引きこもりKHJ親の会における実態－ひきこもりと生活機能. 「引きこもり」の実態に関する調査報告書. 2012;9:5-9.
- 4) 畑哲信, 前田香, 阿蘇ゆうほか. 社会的ひきこもりの家族支援 家族教室の結果から. *精神医学*. 2004;46(7):691-699.
- 5) 斎藤まさ子, 本間恵美子, 真壁あさみ, 内藤守. ひきこもりの子どもをもつ母親の「親の会」での体験－価値観の転換の必要性を認識するまでのプロセス－. *新潟青陵学会誌*. 2012;5(2):30.
- 6) 川北稔. 家族会への参加と引きこもりの改善－民間支援機関における質問紙調査から－. *愛知教育大学教育実践総合センター紀要*. 2006;9:227-236.
- 7) 辻本哲士, 辻元宏. 社会的ひきこもり家族教室に関するアンケート調査. *精神医学*. 2008;50(10):1005-1013.
- 8) 船越明子, 宮本有紀. ひきこもり青年を抱える家族へのサポートおよび家族の子どもへの心理・態度の変容のプロセス. *こころの健康*. 2008;23(2):65-66.
- 9) 木下康仁. M-GTAグラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－. 東京:弘文堂;2003.
- 10) 齊藤万比古. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(研究代表者 齊藤万比古). 2010:35.
- 11) 中垣内正和. はじめてのひきこもり外来. 43-48. 東京:ハート出版;2008.
- 12) 斎藤まさ子, 本間恵美子, 真壁あさみ, 内藤守. ひきこもりの子どもをもつ母親の「親の会」での体験－価値観の転換の必要性を認識するまでのプロセス－. *新潟青陵学会誌*. 2012;5(2):30.
- 13) 齊藤万比古. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(研究代表者 齊藤万比古). 2010:36.
- 14) 佐藤俊一. ケアを生み出す力－傾聴から対話的關係へ－. 107-108. 東京:川島書店;2011.
- 15) 境泉洋. ひきこもり概念の形成史. ひきこもりに出会ったら－こころの医療と支援－. 6-7. 東京:中外医学社;2010.
- 16) 中垣内正和. はじめてのひきこもり外来. 42. 東京:ハート出版;2008.